令和８年度　ふくしま学力調査 報告書　【概要版】

令和８年１１月２７日　福島県教育委員会

１　令和８年度ふくしま学力調査の概要

報告書 P1 ～ P2

１　調査の目的

児童生徒一人一人の学力の伸びや学習等に対する意識、生活の状況等を把握する調査を実施し、教育及び教育施策等の成果と課題を検証するとともに、その改善を図るための方策を構築し、一人一人の学力を確実に伸ばす教育を推進する。

２　調査概要

調査実施日

令和8年5月18日（月）～6月5日（金）の15日間

※ 各学校において期間の中から学年ごとに1日を選択し、実施。

調査対象

（1）小学校　380 校　　※ 義務教育学校前期課程及び県立特別支援学校小学部を含む。以下同じ。

（2）中学校　208 校　　※ 義務教育学校後期課程及び県立特別支援学校中学部を含む。以下同じ。

（3）児童生徒数（人）

小学校4年生	小学校5年生	小学校6年生	中学校1年生	中学校2年生
12,628	13,213	13,457	13,306	11,984

調査事項

（1）調査方法

○ 1人1台端末を使用したCBT（※今年度調査より実施）

（2）教科に関する調査

○ 小学校第4学年～第6学年　国語、算数

○ 中学校第1学年・第2学年　国語、数学

（3）質問調査

○ 学習意欲、学習方法及び生活習慣等に関する事項



結果の活用

（1）児童生徒の学習改善への活用

各学校は、個人結果票をもとに児童生徒に学習改善に向けたアドバイスを行う。また、個人結果票を家庭学習の充実に向けて保護者と連携するための資料とする。

（2）各学校の授業改善への活用

各学校は、県教育委員会が提供する「校内研修活用資料」や「グラフ化ツール」、各校一斉参加型オンライン分析研修会（ハイブリッド型分析研修会）の機会等を活用して、返却された結果から児童生徒の学力のレベルや学力の伸びの状況等を分析する。その上で、学力向上プラン等を見直し、2学期以降の授業改善につなげていく。

なお、結果分析に当たっては、管理職や学級担任、教科担任等が単独で行うのではなく、結果帳票を基に、複数の教職員の視点で日頃の見取りと結果データを往還させながら、多面的に行うことを推奨する。

（3）好事例の横展開

各学校は、学力を伸ばした可能性のある教員の取組の共有や、県教育委員会が作成する「学力の伸びを引き出した学校の取組事例集」の活用をとおして、自校の実態に応じた学力向上の取組の改善・充実を図る。

３　「学力のレベル」と「学力値」の対応表　（例：３－Ｃは“７”、１０－Ａは“３０”）

学力のレベル	１ C	B	A	２ C	B	A	３ C	B	A	４ C	B	A	５ C	B	A	６ C	B	A	７ C	B	A	８ C	B	A	９ C	B	A	１０ C	B	A	１１ C	B	A
学力値	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30	31	32	33

2　国語に関する調査結果

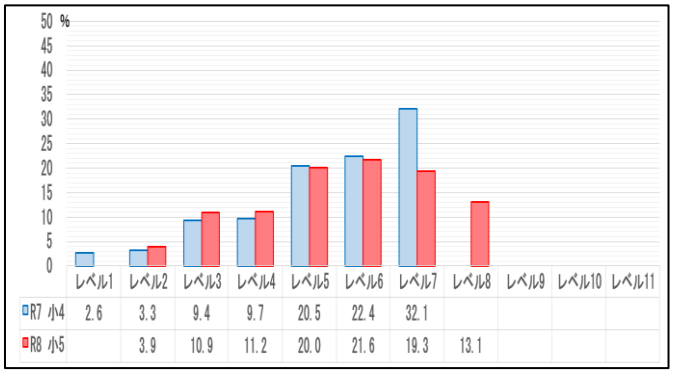
報告書
P3 ～
P19

1　昨年度の調査からの変容（同じ学年集団）【前年度：青、今年度：赤】

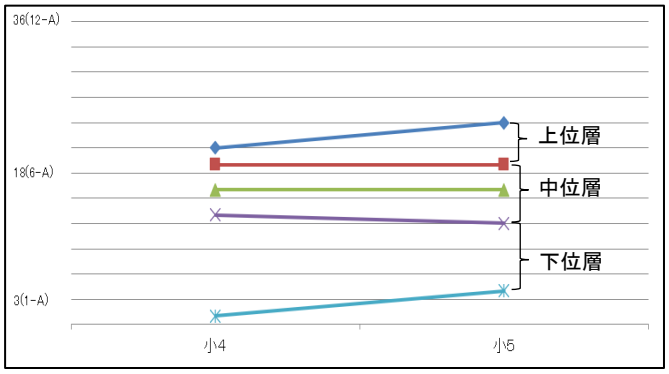
折れ線の凡例　◆ 最上位の児童生徒が属するレベル　■ 上位から25%に位置する児童生徒が属するレベル　▲ 中央に位置する児童生徒が属するレベル
×　上位から75%に位置する児童生徒が属するレベル　＊ 最下位の児童生徒が属するレベル

（１）現小学校５年生

①「学力レベル」の分布（R7 ⇒ R8）

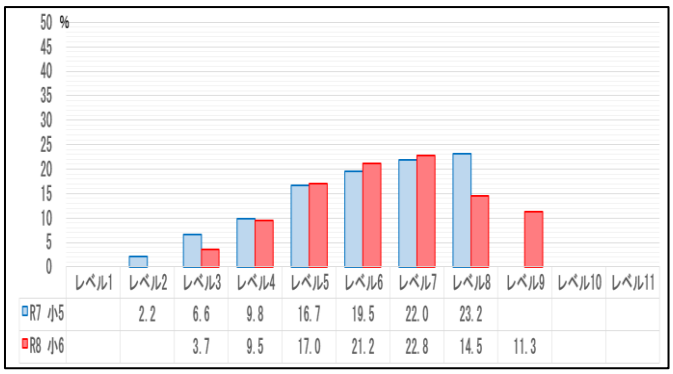


②「学力の伸び」の状況（小４ ⇒ 小５の変容）

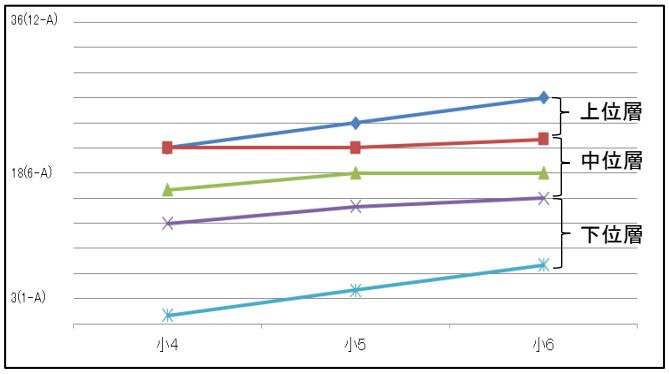


（２）現小学校６年生

①「学力レベル」の分布（R7 ⇒ R8）

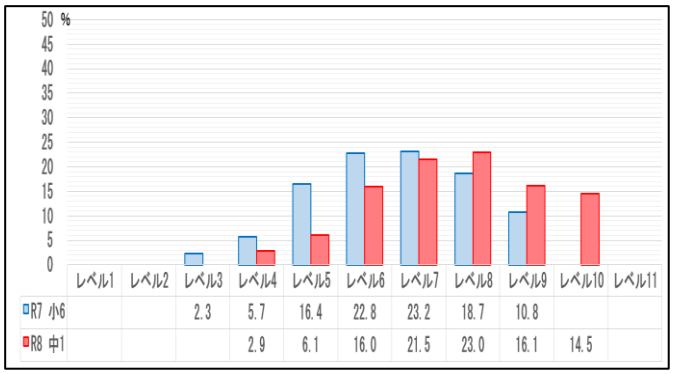


②「学力の伸び」の状況（小４ ⇒ 小６の変容）

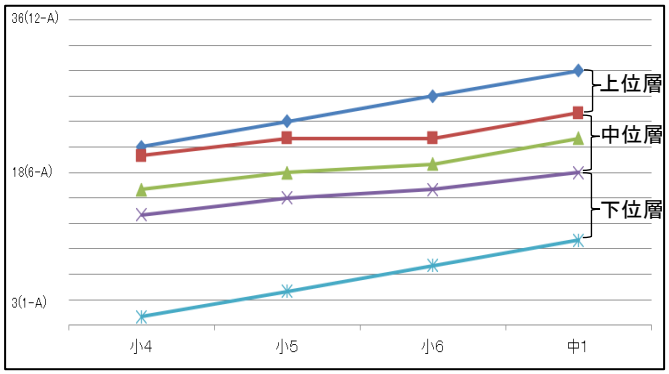


（３）現中学校１年生

①「学力レベル」の分布（R7 ⇒ R8）

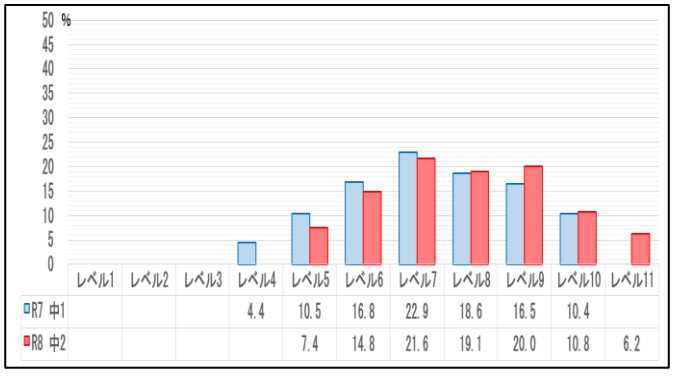


②「学力の伸び」の状況（小４ ⇒ 中１の変容）

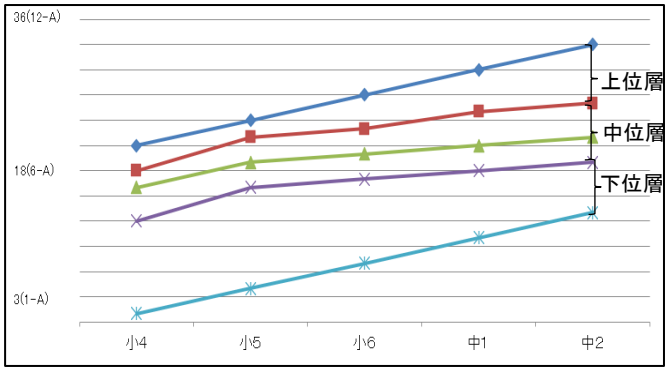


（４）現中学校２年生

①「学力レベル」の分布（R7 ⇒ R8）



②「学力の伸び」の状況（小４ ⇒ 中２の変容）



２　教科に関する調査の結果から

（１）平均の学力値の変容

学年	小4	小5	小6	中１	中2
現中2	R4 １５	R5 １９	R6 ２０	R7 ２１	**R8 ２３**
現中１	R5 １６	R6 １８	R7 １９	**R8 ２２**	
現小6	R6 １６	R7 １８	**R8 １９**		
現小5	R7 １６	**R8 １６**			
現小4	**R8 １３**				

（２）前年度調査から学力が伸びた児童生徒の割合（%）

学年	R7	**R8**
小学校5年生	66.9	**４６．６**
小学校6年生	56.4	**６０．０**
中学校１年生	59.7	**８３．６**
中学校2年生	48.6	**６４．４**

※ 現小学校4年生の学力の伸びが見られるのは、
来年度調査実施後となる。

（３）県全体の「学力のレベル」と「学力の伸び」の変化

○ 年度の異なる同じ学年と比べ、中学校１年生は前年度より数値が１高い。

● 年度の異なる同じ学年と比べ、小学校4･5年生は前年度より数値が2～3低い。

○ 同じ学年集団と比べると、中学校１年生は前年度から数値が3上がっており、学力を大きく伸ばしている。また、小学校6年生、中学校2年生は、前年度から数値が１～2上がっており、学力を着実に伸ばしている。

○ 同じ学年集団と比べると、中学校１年生は、8割を超える生徒が、前年度から学力を伸ばしている。

（４）県全体の「学力のレベル」の分布

○ 年度の異なる同じ学年と比べ、中学校１年生は「学力のレベル」の平均が、前年度調査から１高い。

● 年度の異なる同じ学年と比べ、小学校4年生は「学力のレベル」の平均が、前年度調査から１低い。

○ 同じ学年集団と比べると、中学校１年生は、「学力のレベル」の平均が、前年度調査から１上がり、他の学年は同じである。

● 同じ学年集団と比べると、学年が上がるにつれ、上位レベルに属する児童生徒の割合は少なくなり、下位レベルに属する児童生徒の割合が多くなる傾向がある。

（５）県全体の「学力の伸び」の状況

○ 中学生において、生徒が属する全ての層においてレベルが上がっている。特に、中学校１年生の「学力の伸び」が、他の学年に比べて大きい。

● 小学校5年生の上位から75%に位置する児童が属するレベルについては、数値が下がっている。

（６）総括

小学校6年生、中学校１･2年生において、年々着実に学力が伸びている。特に、中学校１年生は8割を超える生徒が前年度調査から学力を伸ばしている。

一方、小学校4･5年生は前年度の異なる同じ学年に比べ数値が2～3低くなっていることや、小学校5年生の中位層の児童の「学力の伸び」が少ない。

これらのことから、学習内容の確実な定着を図るため、児童生徒一人一人の学習状況に応じた指導を充実させ、学びのつまずきを早期に把握し、解消することが重要である。また、上位･中位に伸び悩みが見られるため、授業では下位の児童生徒の「わからなさ」を明らかにし、協働的な学びによって多様な考え方に触れさせながら課題を解決していく過程を通して、浅い理解から深い理解へと導いていくような授業づくりが大切である。

3　算数・数学に関する調査結果

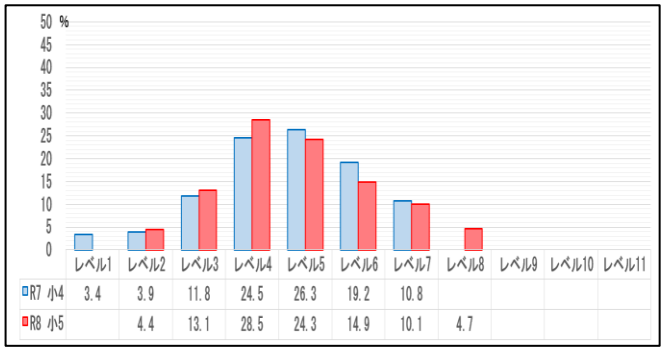
報告書 P3 ～ P19

1　昨年度の調査からの変容（同じ学年集団）【前年度：青、今年度：赤】

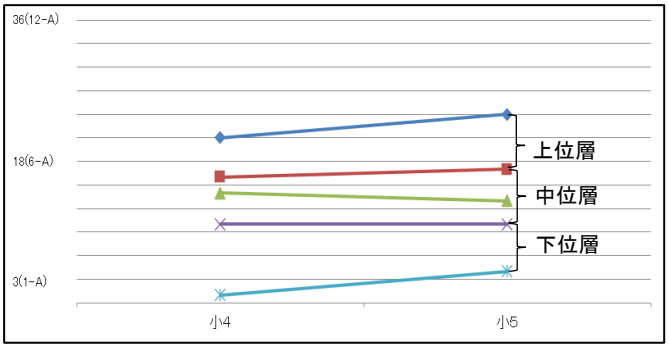
折れ線の凡例　◆ 最上位の児童生徒が属するレベル　■ 上位から 25%に位置する児童生徒が属するレベル　▲ 中央に位置する児童生徒が属するレベル
× 上位から 75%に位置する児童生徒が属するレベル　＊ 最下位の児童生徒が属するレベル

（１）現小学校５年生

①「学力レベル」の分布（R7 ⇒ R8）

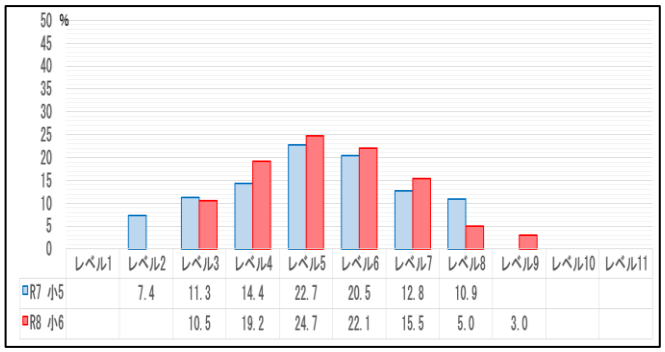


②「学力の伸び」の状況（小４ ⇒ 小５の変容）

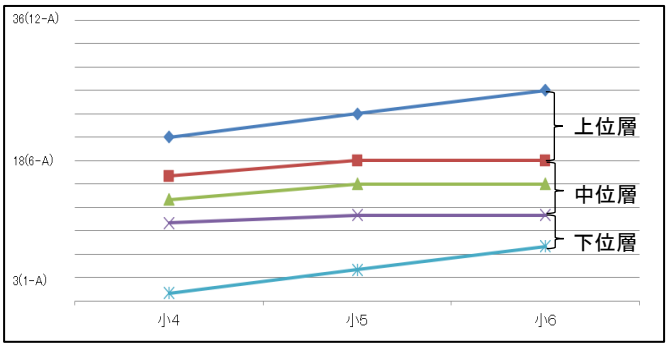


（２）現小学校６年生

①「学力レベル」の分布（R7 ⇒ R8）

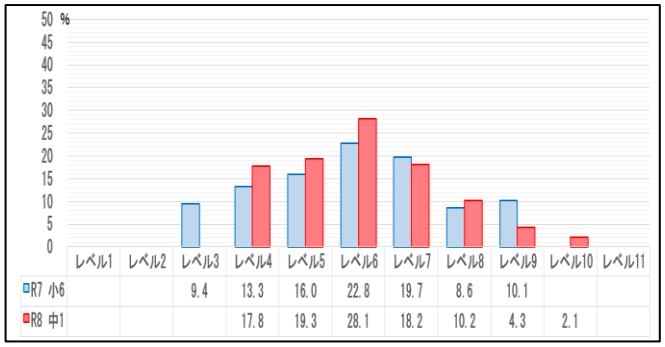


②「学力の伸び」の状況（小４ ⇒ 小６の変容）

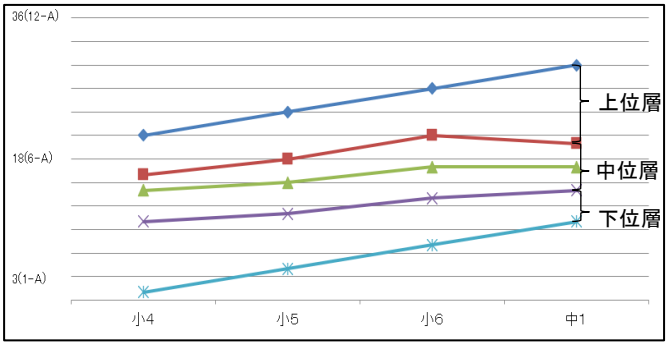


（３）現中学校１年生

①「学力レベル」の分布（R7 ⇒ R8）

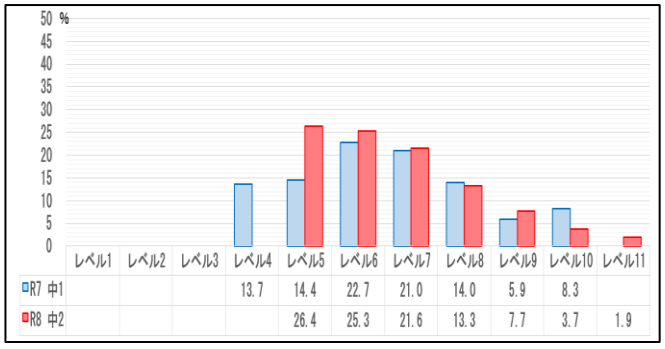


②「学力の伸び」の状況（小４ ⇒ 中１の変容）

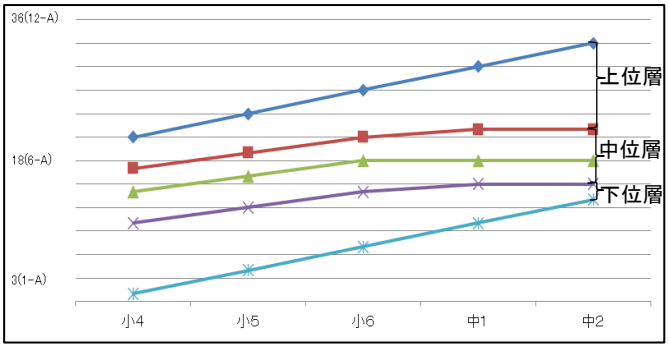


（４）現中学校２年生

①「学力レベル」の分布（R7 ⇒ R8）



②「学力の伸び」の状況（小４ ⇒ 中２の変容）



２　教科に関する調査の結果から

（１）平均の学力値の変容

学年	小4	小5	小6	中１	中2
現中2	R4 １４	R5 １６	R6 １７	R7 １９	R8 **１９**
現中１	R5 １３	R6 １５	R7 １７	R8 **１７**	
現小6	R6 １３	R7 １５	R8 **１５**		
現小5	R7 １３	R8 **１３**			
現小4	R8 **１２**				

（２）前年度調査から学力が伸びた児童生徒の割合（%）

学年	R7	R8
小学校5年生	69.5	**４７．４**
小学校6年生	72.3	**４９．８**
中学校１年生	63.2	**４６．１**
中学校2年生	71.7	**４８．７**

※ 現小学校4年生の学力の伸びが見られるのは、
来年度調査実施後となる。

（３）県全体の「学力のレベル」と「学力の伸び」の変化

● 年度の異なる同じ学年と比べ、全ての学年において、前年度より数値が１～2低い。

● 同じ学年集団と比べ、全ての学年において、前年度から数値の変化が見られない。

（４）県全体の「学力のレベル」の分布

● 年度の異なる同じ学年と比べ、小学校4･6年生、中学校 １ 年生は「学力のレベル」の平均が、前年度調査から１低く、他の学年は同じである。

○ 同じ学年集団と比べると、全ての学年において「学力のレベル」の平均が、前年度調査と同じである。

● 同じ学年集団と比べると、学年が上がるにつれて、上位レベルに属する児童生徒の割合は少なくなり、下位レベルに属する児童生徒の割合は多くなる傾向がある。

（５）県全体の「学力の伸び」の状況

○ 小学校5年生の上位から25%に位置する児童、中学校１年生の上位から75%に位置する生徒が属するレベルについて、伸びが見られる。

● 上記以外の学年･レベルにおいては、中位層（上位から25%～75%に位置する児童生徒が属する）の「学力の伸び」が見られない。特に、小学校5年生の「中央に位置する児童が属するレベル」と中学校１年生の「上位から25%に位置する生徒が属するレベル」については、数値が下がっている。

（６）総括

全ての学年において、前年度調査から学力レベルに変化がなく、前年度の同じ学年と比べて全ての学年において、数値が１～2低くなっている。また、学年が上がるにつれて、下位の児童生徒の割合が多くなっている傾向がある。

これらのことから、下位の児童生徒がどの段階でつまずいているのか経年のデータで分析し、要因を考察して具体的な指導改善に生かしていくことが大切である。

一方で、成果が見られた部分はどこか、たとえ小さくてもよさの変化があった部分に注目し、普段の児童生徒の様子と比較しながらよさの要因を組織で確認したい。よさを組織の「強み」と捉え、強みをさらに伸ばしたり、他の教員の指導に広げたりしていく取組が特に大切である。

4　児童生徒質問調査結果と「学力のレベル」

報告書 P27 ～ P69

1　授業に関すること

（１）調査結果から

① 「学力のレベル」が高い児童生徒は、学習課題を把握したり、話合いや交流を通して自分の考えをもったり、学習したことと既習事項を関連付けたりする傾向が見られた。このことから「主体的・対話的で深い学び」の視点からの授業改善が、学力向上に寄与していることがうかがえる。

② 特に、質問「授業で学んだことが、以前に学習した知識とつながったことがありましたか」と「学力のレベル」の高さに関係が見られる。

（２）指導に当たって

① 全ての子どもに学びを自分事として捉えさせるため、教材との出合わせ方を工夫し、問いや思い・願いを引き出したり、学習課題を理解しているかを確かめたりする等、自ら学び出そうとする導入にすることが大切である。

② 子どもが自己調整しながら個別最適な学びを進めたり、多様な他者と協働的な学びを進めたりしながら、個別最適な学びと協働的な学びの一体的な充実を展開することが大切である。

③ 「まとめ・振り返り」において、「何が分かり、何ができるようになったのか、どのように学習したか」を、子どもが自覚できる終末にする。そして、「授業でどのようなところが成長したと思うか」「次は、どのようなことに取り組みたいか」を子ども自ら考え、次の学びにつなげられるようにすることが大切である。

2　学習意欲や学習環境に関すること

（１）調査結果から

① 授業の内容がよく分かったという児童生徒の実感と「学力レベル」の高さに強い関係が見られた。

② 学習の準備を整える等の授業に臨む心構えや、友達や先生が自分のよいところを認めてくれたという実感と「学力レベル」の高さに関係が見られた。

③ 教師の話や友達の話を聞き、自分の考えを伝えることができる授業における「聞く」「話す」を安定して実施できることと「学力のレベル」の高さに関係が見られた。

（２）指導に当たって

① 授業を通して児童生徒一人一人が「分かる」「できる」を実感できるよう、問いや手立てを十分に練って単元や授業をデザインしていくことが大切である。また、「分からない」と言える学級風土や、児童生徒の疑問や不安を教師が見取り、安心して学べる学習環境を保障することも大切にしたい。

② 始業前に学習用具を準備しておく等のよりよい学習習慣の形成を図る。教師が積極的に児童生徒のよいところをほめたり、授業中の発言を価値付けたりすること、また、児童生徒同士が互いのよさを認め、高め合う雰囲気を醸成することが大切である。これらにより自己肯定感を高め、学力向上につながると考えられる。

③ 教師が「話す」授業ではなく、教師が「みる」、「きく」、「つなぐ」授業を意識し、児童生徒が相手を意識した聞き方や話し方ができるようコーディネートしながら、対話的な学びを実現させることが大切である。

3　家庭での生活に関すること

（１）調査結果から

① 土曜日や日曜日など学校が休みの日に勉強する時間の長さと「学力のレベル」の高さに強い関係が見られた。ただし、小学校4・5年生では、1～2時間程度が関係のピークだった。

② 読書の冊数と「学力のレベル」の高さに関係が見られた。

③ テレビゲームやスマートフォンの使用について、家庭で約束を決めていることと、「学力レベル」に関係が見られた。

（２）指導に当たって

① 休日における家庭学習の時間の確保に加えて、その内容や方法を工夫し、その取組を振り返り見直す機会を設ける等、学校と家庭・地域の連携を図りながら児童生徒の自己マネジメント力を育むことが大切である。

② 読書に親しむ機会を増やすことや読書環境を整えることなど読書量を増やす取組は、学力の向上に寄与するものである。今後も学校や地域の図書館などを活用し、児童生徒に幅広い読書活動を促すことが大切である。

③ 情報モラルについては、学校のカリキュラムの中で計画的・具体的に指導するとともに、学校と家庭が連携して子どもとテレビゲームやスマートフォンの利用時間等について対話したり、考えたりしてルールを決めるなどの、自己決定・自己調整力育成の視点も大切である。

5　学校質問調査結果から見える学校の取組状況

報告書
P70 ～
P91

1　学校・教職員の学力向上に向けた取組状況



○ 小学校において校長が「ほぼ毎日」授業を見て回る割合が継続して伸びている（82.1%から 85.1%）ほか、小・中学校共に校長による教職員間での話合いへの働きかけや研修の奨励のもと、学級・学年運営の課題などを全教職員で共有して組織的に対応する取組が定着・進展している。

● 児童生徒の学力の現状把握と分析を行い、課題把握を「よく行った」と回答した割合が両校種ともに3年連続で下降傾向にある。

2　令和８年度の小学校６年生、中学校３年生に対する取組状況



○ ほとんどの学校で、家庭学習の課題を計画的に与える取組が継続的に行われている。

○ 家庭学習の課題についての評価・指導が計画的かつ継続的に行われている。

● 児童生徒の勉強に対する熱意がやや低下してきている傾向にある。

（１）現小学校６年生、中学校３年生に対する国語の状況について



○ 発達段階に応じて、児童生徒に理由をつけて考えを発表させたり、書かせたりする指導をしている。

○ 中学校3年生について、理由をつけて考えを発表させたり、書かせたりする指導の割合が増加している。

（２）現小学校６年生、中学校３年生に対する算数・数学の状況について

○ 国語に比べ、補充的・発展的な学習を行う時間を確保する学校の割合、習熟の早い児童生徒に対する発展的な内容を扱った指導の割合がやや大きい。

○ どちらの学年においても、理由をつけて考えを発表させたり、書かせたりする指導の割合が年々増加している。

3　調査結果の活用状況

○ ほぼ全ての学校が、個人結果票を返却する機会に、児童生徒をほめたり、具体的な助言を与えたりしている。

○ 調査結果から把握した内容を全教員で共有し、具体的な授業改善にいかしている学校が年々増加している。





6　特別寄稿　宮城教育大学教職大学院 田端健人教授より

報告書
P103 ～
P104

令和4年3月より、ふくしま学力調査等の結果分析を活用したエビデンスに基づく支援を行うため、宮城教育大学教職大学院の田端健人教授を分析協力者に招き、研究を進めている。前項で紹介した「グラフ化ツール」についても、田端教授の協力を得て作成したものである。今後も、田端教授と連携しながら、データ分析を活用したエビデンスに基づく支援を行っていく。

「学力」とは何か？

宮城教育大学教職大学院　教授 田端 健人

そもそも「学力」とは何でしょうか？ さらに限定して、全国学力・学習状況調査（以下「全国学力調査」と略記）が測定している「学力」とは何か、ご存じでしょうか？

最も流布しているのは、「学力＝テストで点を取る力」という図式でしょう。「学力」といえば、高校や大学等の入学試験を連想し、試験のテスト問題を解く知識・技能と思うのではないでしょうか。教科書や参考書にある各教科の膨大な知識を記憶し、それを活用して難しいテスト問題を解く力、これも確かに「学力」です。しかし、全国学力調査で測定している「学力」は、このような「テストで点を取る力」ではありません。

文部科学省の通知「令和８年度全国学力・学習状況調査に関する実施要領」（令和７年 12 月５日）の、「4. 調査事項」（ウ）の出題内容の説明によれば、①として、「実生活において不可欠であり常に活用できるようになっていることが望ましい知識・技能等」とあります。「実生活」で利活用する知力が「学力」です。「10%増量は、増量前の量の何倍か」という問題が、令和 7 年度全国学力調査で出題されましたが、これは実生活でありふれた問題でしょう。全国の児童の約 60%（約 60 万人）がこの問題に正答できないことが、学力向上の課題です。

また、調査の出題内容の②として、「知識・技能を実生活の様々な場面に活用する力や、様々な課題解決のための構想を立て実践し評価・改善する力等」ともあります。「実生活の様々な場面」で知識・技能を活用する力とか、人生や社会での「様々な課題解決」を「構想」する力、その構想を「実践し評価・改善する力」こそ、全国学力調査の「学力」です。この定義では、主体的に課題解決しようとか、率先して実践しようとか、改善しようといった児童生徒の主体性や意志の力が強調されています。決まったことを決まった通り反復する力は、全国学力調査の「学力」とは対極にあります。つまり、言われたことを言われた通りにする力を訓練する教育は、全国学力調査の正答率を上げるためには、逆効果です。

高度に文明化した社会では、多種多様で膨大な文字や記号や図表を主体的に読みとり、活用しなければ、一定の文化水準で生きていくことは困難です。「学力向上」とは、児童生徒が実生活や実社会を主体的に評価し改善し生きていくための意志や知力を向上させることです。それを「テストの点数を上げること」とはき違えると、本筋を見失ってしまいます。

子どもが廊下を走らなくなったら、学力が上がったという話を聞いたことがあります。その学校では、廊下を走ると危ないということで、全学年で学校生活の改善を試みました。走った回数を毎日グラフにして廊下に貼り出しました。日が経つにつれ、回数は、半分、三分の一、四分の一と減少し、その成果を各クラスで喜んだそうです。このように、子どもたちが自分たちの生活を評価・改善できるようになることこそ「学力向上」です。教科問題の平均点の上昇は、その後に自ずとついてくるものです。令和 7 年度全国学力調査の算数では、ブロッコリーの生産量の推移をグラフから読みとる問題がありました。答えは二倍です。こんな問題は、廊下を走る人数の推移グラフを日常で読み取っていれば、簡単に正答できます。

『ふくしま学力調査 学力の伸びを引き出した学校の取組事例集』は、児童生徒が生きる生活世界に密着した学力向上事例の宝庫です。例えば、ある中学校の取組「『自分にはこれがある、自分ならこれができる』自己肯定感・自己有用感を育む学校づくり」も好例です。この学校では、「対話と考え議論する活動を通して、道徳的価値について自分事として捉え、人間としての生き方について自覚を深める時間を確保した」とあります。また教職員全員で「生徒を伸ばす『ほめ方』」を共有し、生徒が「自分の考えを自由に表現する安心安全な学級風土」を醸成し、生徒による「アウトプットの機会」を確保したとのことです。画一的な一斉授業から、「生徒主体の授業へ変革」したともあります。

児童生徒一人ひとりが学びの主体となり、自分の考えを自由に表現すること、それを仲間たちが聞き反応してくれる手応え、役割を交代し、仲間のユニークな表現に触れること、それに共感し、あるいは自分との違いに気づくこと、こうした生き生きとした人間関係の中でこそ、自己有用感や集団的効力（私たちはできる）感も高まり、自分（たち）は学校や社会のエージェントだという意識も芽生えるでしょう。教科を超えたこうした底力が土台となり教科の「学力」も向上する、というのが私の学力データ分析と整合的です。結果としてこの中学校では、県平均を下回っていた学力値が、県平均を上回ったといいます。私はこの変革を「奇跡」と呼びたいですし、同様の「奇跡」は福島県のいたる所で、今日もまた起きていると信じています。